

日本の総合的人類学の先覚者「鳥居龍蔵」 その膨大な資料がデジタル化されて蘇る。

日本の人類学、考古学、民族学など幅広い分野で先覚者となった偉大な学者がいる。鳥居龍蔵である。これまで資料が散逸し、研究不足だった鳥居氏の膨大な資料が見つかった。しかし資料は古く状態も良くない。「鳥居龍蔵復活プロジェクト」は、これを死蔵させることなく、現代や後世の学者たちが研究できるようにデジタル化して、保存しようという活動である。

「日本を離れて、日本を発見する」
独自の発想で後継者たちに影響を与える。

鳥居龍蔵と聞いてピンとくる人はそう多くはないだろう。しかし、日本文化解明の三大理論として有名な「日本民族複合起源論」「日本騎馬民族説」「照葉樹林文化論」などよりもはるか以前に、壮大なスケールで日本人と文化のルーツを探る手法を確立し実践した学者である。

「鳥居龍蔵復活プロジェクト」の主要メンバーである高知工科大学総合研究所の赤澤威教授は語る。

「鳥居龍蔵は『照葉樹林文化論』の中尾佐助や『日本騎馬民族説』の江上波夫のように、理論として体系付けを行わなかっただけで、後世に与えた影響は計り知れないほどでした。むしろ、彼らが目標とした学者なんですね。東大の名誉教授だった民族学者大林太良先生などは、これらの説のルーツは鳥居龍蔵の業績にあるとまで言っています。しかしその後、鳥居先生の研究を受け継いで、整理し、後世に伝える努力がなされなかったために、残念ながら知る人ぞ知る人物になってしまった。そこで鳥居先生の残した資料を保存し、その学問を再構築するとともに、一般の人にも知っていただくというのが『鳥居龍蔵復活プロジェクト』の全体像であり、今回のデジタルアーカイブ事業はその一端なのです」

鳥居龍蔵は1895年、25歳の時に中国の遼東半島を調



満州で現地調査する鳥居龍蔵(右)

査した。この時の感動が以後の海外調査の原動力となった。その後、台湾、千島列島、モンゴル、シベリア、中国、朝鮮半島などの東アジアのほか、南米の遺跡なども訪れている。

時代を考えると危険も多かったはずだが、辺境の地もおかまいなしで、鳥居の好奇心はとどまることがなかった。この間に中国東北部で初めてドルメン(支石墓)を発見したほか、朝鮮半島でもドルメンを発見し、朝鮮にも石器時代があったことを確認した。また、平壤郊外の古墳を漢(楽浪郡)のものとして指摘した。さらに絶滅の危機にあった千島アイヌを調査するなど、その業績は枚挙にいとまがない。

しかし最大の業績は、明治の時代から、日本を離れてアジア各国を調べ上げることで日本文化にアプローチしようとした手法にあるのだと赤澤教授はいう。

発見された数万点に及ぶ資料で
鳥居龍蔵の学問世界が再構築される。

また当時としては画期的なことに、鳥居はカメラをフィールドワークに持ち込んだ。この写真が赤澤教授との接点となる。1990年に当時東大で研究していた赤澤教授が、倉庫にあった段ボールを何の気なしに開けると、鳥居が



鳥居記念博物館で見つかった膨大な資料

撮影した2千枚のガラス乾板が出てきたのだ。赤澤教授はすぐさま現像したが、なにしろメモもなにもない。なんとか各分野の専門家の協力を取り付けて、年代や場所を特定し、展示会を行うまでになった。100年前のアジア諸地域の写真、もはや世界のどこを探してもみつからないような貴重な画像だ。しかし、そこにあったのは、鳥居が東大の助教授として研究していたころの写真だけであったし、断片的な資料にすぎなかった。

ところが、2000年になって徳島県立鳥居記念博物館で、数万点に及ぶ膨大な新資料が見つかったのだ。未刊原稿2千枚をはじめ、日記、フィールドノート、書簡、スケッチ、函版、標本、中には東大で発見されたガラス乾板の資料もあった。点ではなく、面で鳥居龍蔵の学問をとらえられる資料だ。

「ただし、劣化が激しく、その保存は一刻を争います」と赤澤教授。そこで貴重な資料を後世に残すべく、デジタルアーカイブ化作業が始まったのである。鳥居龍蔵は晩年



資料をデジタルアーカイブ化する作業が進んでいる

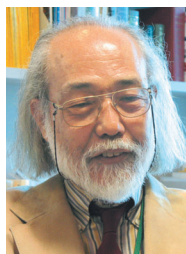
まで中国で暮らしたため、中国や韓国にも資料が散在している。こうした資料もプロジェクトの対象になっている。デジタル化といっても単純に目録映像にするだけではない。学者や一般人がその目的に合わせて検索できるようなインタラクティブなものが構想されている。

「鳥居先生は弟子を使わず、家族だけで研究・調査を行ったこともあり、資料が散逸し、きっちりとした検証が行われていませんでした。しかも、研究対象が複数の分野にわたるといって、専門化された今では考えられないくらい大きなスケールなので、全体像をとらえきれなかったとも言えます。鳥居先生の学問世界がこの事業によってようやく再構築されようとしているのです」

同年代に活躍した南方熊楠や牧野富太郎に比べ、鳥居龍蔵の一般的な知名度が低いことに赤澤教授は忤怩たる思いがあるという。このアーカイブ化が完成したとき、鳥居龍蔵がその業績に値した評価を得られるようになることにも期待を寄せているということだった。

●担当者より

復活プロジェクトの第一歩を踏み出すことができました。



鳥居先生の資料は膨大で、まだ整理が始まったばかりです。しかしAJOSCさんのご支援もあり、ともかくも第一歩を踏み出すことができました。グローバル化といわれている現在だからこそ、客観的に日本を見つめた鳥居先生の姿勢には学ぶことが多いのです。研究者だけにとどまらず、一般の方にも役立つデータベースを作成したいと思います。今後のご支援をよろしくお願いいたします。

高知工科大学総合研究所 教授 赤澤威さん